



門前町の二三について：兵庫県下の場合

白石， 一郎

(Citation)

兵庫地理, 10:40-48

(Issue Date)

1966-03-28

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90002243>



門前町の二三について

— 兵庫県下の場合 —

白 石 一 郎

1. は じ め に

著名なる神社仏閣の門前には参詣者を対象とした土産物店料理屋、宿屋が軒をたらし一種特異な集落を形成することがある。

我が兵庫県に於ても中山寺門前たる宝塚市中山寺、清澄寺（清荒神）の門前たる宝塚市清荒神、恵比須神社の門前町より発展したる西宮市、三輪明神の門前町より発達したる三田市三輪、佐保神社の門前より発達した加東郡社町等小さな門前町を入れれば数多くの門前町が存するがその最たるものは宝塚市の中山寺と清荒神のそれであろう。

今この二つの信仰集落たる門前町をクローズアップしてきて分析解明したいと思う。

2. 本 論

(1) 中山寺門前町

① 門前町形成の歴史的過程

中山寺は西暦589年今より1376年前四天王寺に先だつ4年に仲哀天皇大仲姫ゆかりの地に聖徳太子によつて草創された日本最初の観音霊場にして元四天王寺ともよばれ真言宗中山寺派の大本山で安産求子の観音として特に婦人に厚く信仰されてきており往昔は高野比叡の大に匹敵すべき寺域を有し寺坊八十余現在の20倍もの寺域を有していたという。

文武天皇（697—707）の御代に三十三箇所観音霊場の第一番札所となつた。それよりおよそ200余年後衰微した観音巡拝は花山天皇（984—986）のお力で復興されそのときの道順に従つて第二十四番の札所となつた。くだつて源平の戦で平氏が壇の浦で滅亡する直前寿永4年（1185）安徳天皇をお匿いした嫌疑で中山寺は梶原景時のため焼き払われたしかし事実は無根であつたためと、該寺は源氏重代の祈願所であつたために源頼朝によつて再建された。後醍醐の乱はじめてたびたびの兵火で中山寺は焼失したが再興された。天正年間伊丹城主荒木村重の織田信長への叛乱で又炎上した。次いで豊臣秀吉により天下統一がなされたが秀吉は世継ぎのないのをなげいていたが中山寺に祈願して淀君に秀頼を

さずかった。秀吉の死後秀朝は感謝の意をこめて奥の院より十八丁^{ちよう}麓の宿坊のあつた里坊に片桐且元に命じて再建せしめたこれが現在の伽藍であるここが現在の門前町の嚆矢である。

そして徳川中期以後は西国順礼も増してき門前は旅館ばかりであつたようである。寺内五院中の総持院の所有している「庭前^{ちんぜん}衿山四季会品の図」によると図中には津の国中山寺門前角より二軒東若戎舎と記され勅使川かわらなげ、遊女、かまぶろ、そして遠景には眺望大阪御城川口が記されており又池田市麻田良平氏所有の文化文政(1804-1829)頃の発行の一枚摺「中山寺伽藍之図」を見ると、門前東側には北角から東へ数えて戒屋、若戎屋(亀屋の跡)その隣は加茂屋、向ひ側の南角には大黒屋津国屋と並び、また門前西側には北角に、サルヤ、その向ひ側で古くは大芝池と云つた放生池の上に和泉屋がある。そしていづれも仲居が居て夜は三味線の音など洩れて、土地の若者達の遊びの場所でもあつた。この七軒のうちで若戎屋が最も上等の旅宿兼料亭で参勤交代などのときの本陣にもなつていたから普通の旅人では一寸寄り付けなかつたのである。

よい娘見たけりや中山寺の

^{むすめ}
門の東の若えびす

と俗謡にうたわれ多くの美女を抱へて繁昌していた事は数種の一枚摺によつても知られる。

- 1. 中山寺伽藍之図(4種4枚)
- 1. 庭前^{ちんぜん}衿山四季会品之図(1枚)
- 1. 外山滝の図(1枚)
- 1. 中山より道のりの図(1枚)
- 1. 摂津北山巡り道のりの図(2種2枚)

右の内「庭前^{ちんぜん}衿山四季会品之図」は浪速の三木探月斎が描いたものでこの図に拠つて若戎屋の有様を述べると先づ軒下に傘講永代講蠟燭講など三つの大きな提灯がかかつているのは、この講中の定宿を示したものである。家の東側に門があつて之れを通つたら応神天皇勅使ゆかりの勅使川が邸内を流れ花月橋を渡ると広い庭園で泉水には彩雲橋など数個の小さな橋が架かり白来館、遊僊亭、静遠舎、水鶏庵などの茶亭離房が散在し可賀之堂、月見堂、雪見洞もあつてかわらなげの舞台も組まれ花見山、笠かけ山、水鶏阪、ゑをんめ滝もあつて園中美女を連れた遊客三々五々と歩を運び或は庭中或は幔幕の中で酔ふ人もあり唄ひ踊る人も見える。又釜風呂も焚いている。

そして能因歌塚季鷹歌塚、芭蕉句碑も見えるが蜀山人歌塚は庵の陰に隠れてい

るのか見えない。杜若、卯の花も咲いて林泉の美をつくしている。此の庭前の図の欄外に能因の和歌季鷹の狂歌、及び蜀山人の左の狂歌

いま一度若戎屋になるならば

足たゝぬまで酔わんとぞおもふ

など記されている。

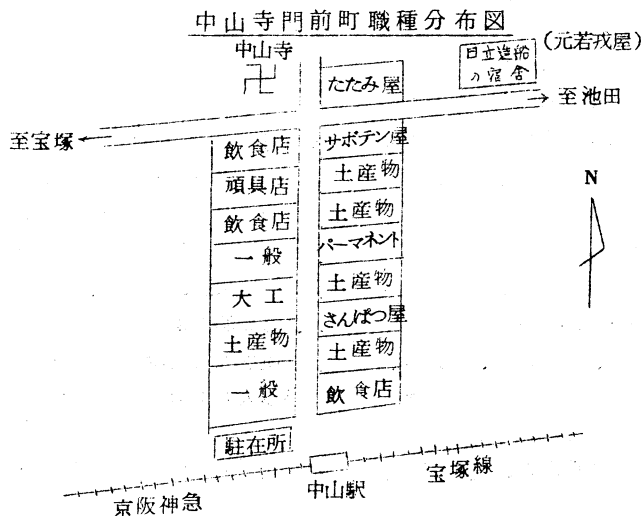
若戎屋が開業したのは文政元年頃であろう。そして庭園を拡張し歌塚や句碑を設けて繁昌していたが明治維新前に没落したのは惜しい。若戎屋の跡は狭くなっているが現在日立造船会社の保養所で橋や泉水など少々佛は残っている。他の宿屋も明治30年国鉄福知山線中山寺駅開業及び明治43年の京阪神急行宝塚線の中山駅開業まであつたがこれらの高速交通機関の敷設でその必要がなくなりさびれてついに廃業され新興の宝塚にうつった観がある。現在は唯土産物店と飲食店のみが営業されている。しかし現在でも往年の宿屋の屋号すなわち、かつの屋、松の下、いづみ屋、大黒屋を持っている家が存する。

斯くの如く門前の宿屋は消失したが寺内の総持院等の五か院はユースホステルや一般信者のとまる宿屋となつて前者に代っている。

②現在の門前町の地理的考察

現在京阪神急行宝塚線中山駅前には二十軒ばかり門前町としての形態をのこして土産物店飲食店が存する。

土産物店は五軒、飲食店は三軒で徳川時代中期に比べて宿屋は一軒もなくなり大変なさびれ方である。下に中山寺門前町の職種分布図を示すと瞭然とする。



こうけん
③信仰圏

中山寺は安産祈願本邦随一の靈跡として古来より伝統をたもち代々皇室の崇信もあつく武家庶民からもふかく信仰されてきました。ことに幕末には中山一位の局がここに御平産祈願によつて明治天皇を御安産されてよりいよいよその靈徳をたかめ最近に於ける周辺交通の完備と相まつて全国および海外からの参詣者で日々にぎわっている。

国内で多いのは京阪神を筆頭に名古屋、広島、岡山、九州、三重県の順で、海外では米国、チェッコの在留邦人が多い。

④信仰者の季節的变化

該寺は安産祈願の寺なるが故に一年を通じて「はらおび」をしめるいぬの日に多く「はらおび」をうけにやつてくるといふ。又正月3日間は五穀豊穰祈願と七福神めぐりのため多く、春の彼岸の中の日前後と8月9日の星下り大会式には西国三十三所観音来迎総供養四万六千日功德日のため参詣者が多い。

これがため8月9日は20年前までは京阪神急行宝塚線は終夜運転をしていたが今は平日のみである。

参詣者の交通機関への影響は駅の所在地より門前までの距離の関係で国鉄中山寺駅にはあまり敏感に影響せず阪急線中山駅に鋭敏にさしひびいている。

左に両駅の乗降者人員数及び売上高をあげてみる。

京阪神急行中山駅乗客調

年 月 日	乗 者 数	降 者 数
昭和35年12月3日	2481人	2447人
“ 36 “ 12 “ 3 “	2547	2459
“ 37 “ 12 “ 3 “	2397	2520
“ 38 “ 12 “ 3 “	2626	2549
“ 39 “ 12 “ 3 “	3083	3190

福知山線中山寺駅乗客調

年 月	乗車数(1日平均)
昭和39年 4月	294人
同 5月	285
同 6月	287
同 7月	281
同 8月	275
同 9月	274
同 10月	301
同 11月	285
同 12月	273
昭和40年 1月	297
同 2月	320
同 3月	322

上の表の如く国鉄中山寺駅の乗客数は阪急中山駅のその1割強にしかすぎないこれは後者が中山寺や住宅街に近いため利用者が多いからである。

京阪神急行中山駅売上高

年 月 日	売 上 高
昭和40年1月 元 日	29万円
同 3 日	25万円
同 5 日	11万6千円
同 7 日	6万3千円
同 15 日	12万円
同 27 日	5万5千円
同 28 日	7万円
同 2月 2 日	6万円
同 2月10 日	5万5千円

上の表の如く正月3日間は五穀豊穰祈願と七福神めぐりのため乗車客多きことが出ているが春の彼岸や8月9日の星下り大会式の統計がないのは遺憾である。

(2) 清荒神(清澄寺) 門前町

④ 門前町形成の歴史的過程

清澄寺の開創は寛平5年(893)宇多天皇の御代比叡山の天台座主増命上人を開山の祖とし益信僧都を導師として開創された真言宗の寺である。創設された当時は今の谷間の寺ではなく東南にあたる山上旧清の地30余町歩に中門三重塔金堂園池など七十二坊建ち列っていた。

益信僧都は仏法守護三宝の加護を祈るため地主神として荒神尊を祀った。これが清荒神の名のおこりである。くだつて源平合戦の際源氏多田行綱と平貞能が昆陽野で激しい戦を交えた。これは寿永2年(1183)にて清澄寺はじめ円満院等も兵火のため一たまりもなく焼け失せた。後建久4年(1193)源頼朝によって再建された。

又天正7年(1579)荒木村重の織田信長に対する叛乱で再び戦禍をうけ業火に焼き失せたが豊臣秀吉によつて天正10年(1582)再興され山上の本坊を山麓西の谷奥の院に移したそれより80余年をへて江戸時代の寛文4年(1664)に牛頭天王(今の認牛神堂の前神)を祭つたこの牛頭天王と申すのはもと印度の祇園精舎の守護神で厄除けの神または歳徳神(恵方神)と称し農業の神である。

寛政6年(1794)大阪で出版された「摂津名所図会」に出ている「清荒神風景図」によると当社の位置など今とかなり相違があり殊に(これは画家の誤り

かも知れませんが) 本堂(大日堂)が現在の右崖庵の位置に東面し宝暦建立の石鳥居は「荒神鳥居」としてありますが現在の庭苑は見当らず特に本坊北の庭苑に「庭中真砂にして奇観なり」と書いていることまた本社の東にまだ「かじ水」「あん寺」などがあつたことなどかなり異つていたことが見受けられる。清荒神は寺といつても神仏合体で神が仏を保護する姿を備え幸福と智慧を掌る歓喜天、荒神尊を設つて深く大衆の生活の中にとけこみ現世現人の幸福利益を願つことが祈りの全部である。

明治から大正にかけては寺運もまだ充分でなく寂しい山中の一貧者たる存在で現法主の光浄師も若い頃には草鞋脚絆の旅旅で大阪、神戸はもとより播州丹波路の遠さにつけて正月のお初徳、荒神尊のお札など護牛堂に参詣した農家を目当てに売り歩いたものだということである。そのときの金子でお護符は一体がようやく二銭か三銭で旅費も出ない有様で寺の経営など思いもよらなかったという。

ところが光浄師の代になってからこのお札の販売を全然廃止して了つた。お札は売り歩くものではない様様に申し訳ないことをしたという強い自戒心が起つたのであります。何でもなしのことのようだがこれは大変なかわり方であり自覚であり又勇気であつたと思う。そしてそれ以来わざわざ道を遠しとせず受けにくる少い信者に対し出来るだけの待遇をし喜ばせて返すことに寺では全力をつくしたということである。はるばると参詣に来たよろこび、山に寺に親しむよろこび、お札を受けるよろこび、参詣者もおいおいと数を増して寺もそのもてなしに多忙な日がつきはじめた。

その内に山麓に電車が通ずる日が来ました阪鶴線(福知山線の前身)が大阪から開通して中山寺駅ができ終点に宝塚駅ができたのは明治30年でこれはさ程の影響がなかった。

清荒神が今日の隆盛をみせたのは何といつても阪急電車の前身である箕有電鉄の通じたことである。宝塚線(阪急)が開通したのは明治43年3月10日で10日開業当日の切符売上高1,650枚賃金8,720円以来1日平均1,90円はあげたという。開通当初は清荒神駅と清荒神をつなぐ参道はさびしい山道だった。当時の沿線名勝地として貼り出された宣伝ポスターには、服部の天神、箕面公園、勝尾寺、能勢の妙見宮、山中の牡丹、中山^{かん}観音寺、売布神社、米谷の梅林、清荒神、宝塚温泉、宝塚梅林等がある。

いまの今津線が開通したのはずっと後の大正10年のことである。この電車の開通に伴つて依然中山寺は勿論清荒神の参詣者も倍加し階級の色彩も一変した。

参道八丁というのは有馬街道石鳥居のあるところから山門までの間で鳥居附近

は古くから地名を「六軒茶屋」とよばれているがこれは元清荒神にあつた茶屋のうち六軒が荒木焼（荒木村重の叛乱の戦火）ののち豊大閨時代に有馬街道駄馬制定のことがありそのころ街道に沿つて現在の地にうつりすみ茶屋宿として長い間その役割を果たしてきたことから起つた名である。それが最近再び清荒神道の茶屋として復活しそこから南へ駅までの道は電車の開通でつないだものである。大正のはじめ頃まではここより山門までは途中には一軒の家もなかつた。一方は高い山で一方は深い谷で細い谷道がついていたにすぎなかつた。大正のはじめごろになつてこの山道の中程に山をけずり谷に沿つて土を盛りあげてそこにぽつりと一軒の茶屋ができそこでもぎ餅を売り出した。これが清荒神唯一の名物屋として繁昌したのである。二軒たち三軒たちして山側は土砂をくずして宅地をつくり谷側には石垣をきずき盛土をして人々はだんだんと家をつくつて行き今日のような関西有数の門前町が形成された。清荒神駅開業当時はこんな盛況になるとは夢にも考えていなかった。これが大正から昭和にかけてのほんの4-50年の間にでき上つた門前町の生態である。

② 現在の門前町の地理的考察

京阪神急行宝塚線清荒神駅前より山門まで参道の西側及び小路をはいつた所には参詣者を対象としたる商店は百十余軒あり飲食店28軒食物と土産物店22軒、旅館（山小屋を含めて）7軒、神具仏具商8軒、その他商店40軒余り県下第一の門前町である。

右に清荒神門前町の職種分布図を示すとその殷賑さがしのばれると思う。

③ 信仰圏

清荒神は厄除けの神、農業の神として阪神地方の商人特に水商売の人に信仰厚く播磨丹波の農村にも広く信仰者を持つている。

大阪、神戸などから一つの行楽の如く登山参詣する人も多い。

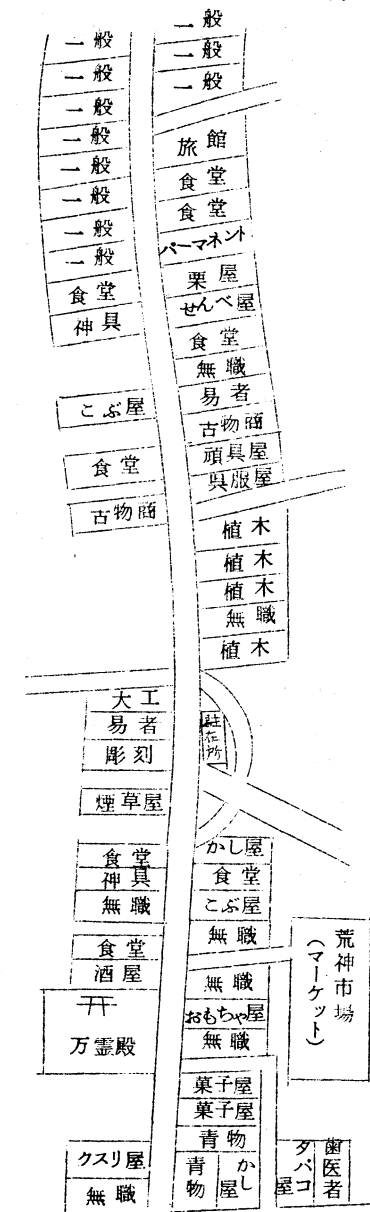
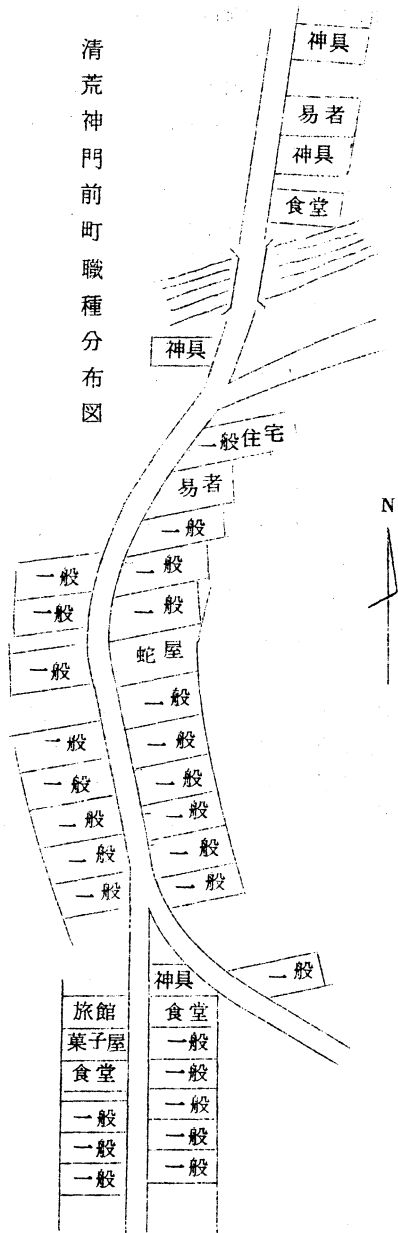
④ 信仰者の季節的变化

今日の清荒神はどのような荒天の日でも参詣者の杜絶^とえた日はないという。以前とちがつて階級の範疇も広まり、日詣で月詣での人も年とともにふえている。

一年中で最も参詣者の多いのは新年の初詣でで物すごい程の雑踏を示しこの日を目ざして沿道を埋めつくす露店の数々信仰にからませて人をよぶ見世物式のわめき声など全く別天地を現出する。次で多いのは年末27、8日の納荒神と新年同日の初荒神（初三宝大祭）である。昭和33年の初荒神の参詣者数は1日約25万人と報告され電車駅より山門までの八丁の山道の参道は一千以上の露店でうずまりないものはない露店百貨店を現出した。これも八丁参道の半ば頃までは

卅 清荒神

清荒神門前町職種分布図



現在寺の所有地になつて他の寺院のように地代というものを徴収しないこともその一団をなしている。次で多いのは15日と日曜である。

該地は住宅地でもあるので最寄駅の乗降者数は参詣者のみと限っていないが宝塚線の清荒神駅の近年の乗降車員数及び売上げ高を示してみると次の通りである。

	乗 車 数	降 車 数
昭和35年12月3日	3370人	3283人
昭和39年12月3日	4075人	3848人

年 月 日	売 上 げ 高
昭和40年1月元旦	145万円
同 1月3日	122万円
同 1月5日	42万5千円
同 1月7日	24万3千円
同 1月15日	45万円
同 1月27日	63万円
同 1月28日	105万円
同 2月2日	8万7千円
同 2月10日	5万2千円

(3) 結 び

中山寺は寺の経営を昔ながらのようにやつてき明治の世になつて急速に文化が発達し交通機関と科学の発達と共に門前の宿屋に泊る必要もなくなり西国巡礼などの参詣者も減つたため老年期の門前町となつて了い清荒神は光浄師等出で真に大衆が心の底から寺を信仰するよう智慧と努力を傾けたため急速に発達し僅々4,50年の間に壮年期の門前町となつた。